

カテキとエラスムスに関する一疑義

菅

圓

吉

栃木縣の羽田の龍江院でカテキ様と稱へて尊崇された古い木像は、第十六世紀の宗教改革時代の有名な神學者エラスムスの像であつて、十七世紀に日本に來た和蘭船エラスムス號の船尾にあつたものと考證家達によつて決定

カテキとエラスムスに関する一疑義（菅 圓 吉）

されたるは周知の事實である。

先年このカテキ問題が盛んで論ぜられてゐた時には私は別に氣にも留めないでゐたが、最近、朝日新聞紙上で、其の木像を和蘭に賣戻す可否が論ぜられた時、丁度私は其の神學者エラスムスを思想史の方面から少々研究中であつたので、此の問題に注意した結果、カテキがエラスムスだと決定される迄に當然一應は觸れらるべくして而も少しも觸れられなかつた或る興味ある事實——それは一挿話にすぎないかも知れないが——を見出した。

勿論、私は、今私が述べやうとする事實によつて先輩達の考證の結果を覆へさうとは思はない。夫れには未だ未だ多くの研究と事實の蒐集に俟たねばならない。然し夫れは今の私には不可能な事であり、又私自身このカテキの木像とデユラーやホルバインの描いたエラスムスの肖像と比較して見て、極めてよく似通つた點を認める一人であるが、然し今も云つた様に、カテキがエラスムスと決定される迄に當然一應は吟味さるべくして、未だ吟味されてゐない一事實があるとすれば、夫れは考證の正確を期する爲めに、又學的良好心を満足させる爲めに、遅ればせながら、此處に述べる事がゆるされると私は思ふ。夫れと共に斷つて置き度い事は、私の持つてゐるカテキに關する知識は新村博士の船舶史考と、史學雜誌に出た村上博士の論文とのみから得られたものであつて、夫れ以外に於てカテキ問題が更にどれ程解決されたかは之を知らない。

倭、キリスト教聖徒傳集を繙くと、エラスムスと云ふ聖徒がある。(此處で注意までに云つて置くが神學者エラスムスは聖徒の中に數へられてゐないばかりでなく、法王バウロ四世から異端とされてゐる) 此の聖徒エラスムスは南イタリアの監督であつて、紀元三百三年頃デオクレシアン皇帝の迫害の時、殉教した。然し彼が如何なる仕方で殉教したかに就いては傳説はまち／＼である。其の中で最もよく知られてゐる傳説に従へば、彼は腹を立割られ内

臓を絞車 (Windlass) にかけて巻き出されたとある。かくて Meuse 河に沿つた Dinant の近くの Lefre には、其の内臓が絞車にかけて巻き出されてゐる木像があると云ふ事である。此の傳説からして聖徒エラスムスは佛國の北方の地方や Walloon の地方では聖アグラバード (St. Agapard) とか聖クラバード (St. Crapard) とか呼んで尊ばれたさうである。Agapard 又は Crapard は Windlass 即ち絞車を意味するのである。又此の聖徒はエルモ (Elmo) と云ふ通稱名でネイプルスでは水夫の守神となつてゐる。而して此の聖徒の像が船に備附けの絞車に附けられて、其のまはりに巻かれる繩は彼の内臓と考へられたらし。

又 Jameson の Sacred and Legendary Art に據ると、此の聖エラスムスは繪畫や彫刻の上では年老いた監督の姿をしてゐて、絞車様の輪を持つてゐたり、時には又蠟燭を手につたり頭上に頂いたりして居て、聖エルモなる名で地中海を渡る水夫達、特にキヤブリアやシリイやスペインの水夫達の守り神となり、ローマの聖ペテロ寺院には聖エラスモの聖櫃が特に捧げられ、プーサンの描いたエラスムス受難のモゼイックがあると云ふ事である。

處が同じ様に聖エルモと呼び掛けられてスペインやポルトガルの水夫達の守り神となつた聖徒にペテロ・ゴンザレスと云ふ紀元十三世紀頃の懺悔者がある。此の人は繪畫や彫刻の上では通常、彼の屬してゐたドミニカン教團の服裝をつけ、手に青い蠟燭を持つてゐるさうである。此の青い蠟燭と云ふのは、つまり船のマストの尖端に起る放電の現象で聖エルモス、フアイヤ (St. Elmo's fire) と云はれてゐる處のものから來てゐるのであつて、其の電氣の火花をば水夫達はエルモ様の火と思ひ、其の火の起つた船は特別にエルモ様の加護があるものと信じたらしい。然しズツと昔では此の火花は前述の聖エラスムスが送るのだと信ぜられたのであるが、どういふわけか其の聖エラスムスの通稱名エルモでペテロ・ゴンザレスも呼ばれる事となつてからは、又その火花はペテロ・ゴンザレスが送るもの

だと信ぜられる様になつたのだらうと云ふ事である。(聖エルモなる名稱は辨天様とか水天宮とか云つた様に水夫の守り神に對する普通名詞になつたのではなからうかと私には考へられる) 夫れは兎に角まだ問題は残つてゐる。何故ならば、第十一世紀頃のルカの聖アンセルム(之は普通、有名なスコラ哲學者の一人として知られてゐるカンタベリーの聖アンセルムではない)も聖エルモと呼び掛けられて、やはり水夫の守り神であつたさうで、ペテロ・ゴンザレスは、聖エラスムスからではなく、此の聖アンセルムからエルモの名と火とを受け繼いだのかも知れないとGould は云つてゐる。然し私はルカの聖アンセルムが水夫の守り神であつたと云ふ明白な記録に自分自身直接に當つてゐなく。

私の見出した記録上の事實は之だけである。聖エラスムスやペテロ・ゴンザレスの肖像や彫刻を實地に見てゐない以上、私は何とも明白な判斷を下しかねるが、若しカテキの木像が何か宗教的な意味を以つて和蘭船にまつられたであつたのなら、夫れは異端神學者エラスムスでない事は可成り強く斷定が出来やうと思ふ。そうすれば、何處の國に於ても一體、水夫達は迷信が強く信心が深いのであるから、聖エラスムスか或は又聖エルモの名で呼び掛けられた誰かの像が和蘭船にまつられたらうとは想像が付き易い事である。

新村博士の船舶史考を見ると、カテキの木像はエラスムス號の船首の裝飾像であつたらうと判斷されたが——尤も吳博士が最近の朝日新聞の鐵帶欄に書かれた『カテキ問題』と題した一文の中にはやはり船首とあるが——、後には其のエラスムス號後でリーフデ號と改名した——の船尾にあつたとある。その斷案の根據となつてゐる長崎の武藤長藏氏の報告を私は直接に知らない。且つ又、私は船舶の建造に關する何の智識も持つてゐない。船の名と同じ名の人の像を船尾に附する習慣があつたのかも知れないが、然し若しさうした習慣がなかつたとすれば、カテキ

の像がエラスムス號の船首像として飾られてあつたと云ふ時程に簡單に片附かなくなる。

前にも述べた様に、木像そのものはデユラーやホルバインの描いたエラスムスの肖像とよく似通つてゐると私は思ふが、肖像の上ではエラスムスは殆んど常にガウン様のものを着てゐるに反して、カテキの像では——私の見誤りかも知れないが——上衣様のものが上下に切れてゐる様である。且つ又左手に何を持つてゐたか、今は缺けて仕舞つて解らないが、若し夫れが蠟燭を持つてゐたのなら、St. Elmo's fire と關係がついて來て、神學者エラスムスでない事が明白になるのである。

又、このカテキの像が和蘭船で何か宗教的な意味を持つてゐたものとして、かう推量されない事もない。丁度聖アウガスチンに二人あつて、一方は我々に普通知られてゐるヒツボのアウガスチンであり、他方は英國にキリスト教を植ゑ附ける上に多大の功績のあつた、従つて英國に於て非常によく知られてゐるカンタベリーのアウガスチンであるが、多くの英國人は、屢々後者と前者を不注意にも混同してゐる様に、聖エラスムスと神學者エラスムスとが混同されて、神學者エラスムスの像が和蘭船で水夫の守り神にまつられる事になつたのではなからうか。

以上は全く推量の上の事であつて、立入つた考證も研究もした事ではない。然しエラスムスなる名——延いては其の通稱名エルモなる言葉が、極めて船と關係の深いものであるとの事實は、之も亦船と縁のあるカテキの像がエラスムスであると判斷される時に、少くとも挿話としてだけでも一應は引合ひに出される可きものだと思つて、淺學をも顧みず此の一文を草したわけである。